

看護職のキャリア形成と学位修得に関わる意向 第1報

地方都市山間部周辺に在住する看護職の動向

澤田 由美*・土井 英子・上山 和子・金山 時恵・杉本 幸枝

木下 香織・栗本 一美・矢庭 さゆり・古城 幸子

看護教育学

(2012年11月28日受理)

本学周辺に在住する看護職を対象に、専門性をもった看護職(以下“看護専門職”)としてのキャリア形成に関する体験や認識、学位修得に伴う意向および大学院進学に関する認識について調査を行った。回答のあった706名は、看護師・准看護師が565名、保健師16名、助産師17名、看護管理者85名であり、勤務場所は病院が最も多かった。研修等の受講経験は、院内研修会への参加が最も多く、次いで教員研修会、認定看護管理者コースへの参加であった。看護職経験年数別では、資格取得を希望している323名のうち、経験年数の浅い看護職は学士課程への進学を希望する者が多く、経験20年以上では修士課程への進学を希望している者が多かった。学位修得希望を職種別にみると、看護師・准看護師では修士課程への進学を希望する者が121名で最も多く、博士課程への進学希望は92名であった。大学院への進学動機としては「専門領域での学修」が最も多く、次いで「資格取得」、「キャリア形成」であり、何れも経験20年以上の回答が多かった。看護職のキャリア形成への支援となる研修会を本学において開催すること、社会人入学支援体制を備え、就業との両立を希望しているベテラン看護職の希望に添う環境整備の重要性が示唆された。

(キーワード)看護職のキャリア形成、大学院修士課程

はじめに

近年、我が国においては看護・保健医療系大学や大学院の設置が急速に進んでいる。2012年4月現在、大学看護学部は209大学、大学院修士課程は147大学、博士課程は71大学に設置されている。看護基礎教育の大学化には、少子高齢社会において、地域の健康を支える看護専門職に対する社会的役割への期待の高まりが背景となり、今後も増加することが予測される。

看護職の活動範囲の拡大に伴い、看護職への期待と質向上へのニーズが強まり、療養及び生活の支援における看護の役割として、適切な看護判断や他職種との連携、コーディネート(マネジメント)能力がより求められるようになった。また、医療技術の急速な発展により、看護に必要な専門的知識・技術が高度化し、患者の人権擁護やインフォームドコンセントの重要性、個人情報保護などの高い倫理性が求められている。病院の在院日数の短縮化による在宅療養者の増加や、高齢者ケアに関わる様々なサービスなど、看護職の活動範囲が拡大する要因は多岐に渡っている。

看護職のキャリア形成は、看護の質の保証のみならず、

日本における医療の質を維持する上でもその意義は大きい。看護職のキャリアがどのように形成され支援されるのかについては、さまざまな調査・研究がおこなわれている。職務満足と看護師のキャリアアップの意義や継続意欲との関連を分析した研究¹⁾では、専門性に関する満足度が人材の定着につながる事が明らかにされている。看護職の経験年数別にキャリアニーズを分析した研究²⁾では、経験10年以降でジェネラリストやスペシャリスト志向が高まる事が明らかにされ、また、大学病院で働く看護師の職務満足と看護実践能力、職業継続意思との関連を分析した研究³⁾では、中堅看護師は専門職業人としての資質や臨床看護実践の向上に関する教育プログラムへの期待が高いことが明らかにされている。また、社会人経験後看護を学んだ医療職者を対象とした研究⁴⁾では、25歳ころを境にキャリア形成が促進され、年齢による制約因子の存在を実感しても自己研鑽意欲は強いことが明らかにされている。

本学は、県北における看護基礎教育を担うべく開学した短期大学を前身としている。幅広い教養と高い倫理観を持ち、保健医療看護に関する深い専門的知識と技能を身につけ、一人一人の健康問題に誠実に関わるとともに、

*連絡先: 澤田由美 新見公立大学 看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

地域社会における保健医療の向上と我が国の看護学の発展に貢献する有為な人材を育成することを目的とし、2010年4月、4年制大学の看護学部を開設し、現在は学士課程における看護職の育成に力を注いでいる。

山間部に位置する本学は、地域医療を支える看護職の生涯学習の拠点としての役割も大きく、看護職に対するキャリア支援が求められている。そのため、本学では地域医療を支援するための専門的知識や技術の修得、地域での看護実践能力、教育、研究能力を高め、包括的に地域医療を支え指導力を発揮できる人材の育成、臨床から地域につなぐ総合的な看護実践能力や教育、研究分野で指導力を発揮できる人材の育成を目的とし、2014年春を目標に、大学院（看護学修士課程）の開学準備を進めている。地域の看護職のキャリア形成のニーズや、リカレント教育の一環として、この地に大学院を設置することの意義は大きいと考える。そこで、本学周辺に在住する看護職（以降、看護職）を対象に、看護専門職としてのキャリア形成に関する体験や認識および学位修得に伴う意向を明らかにし、地方に在住する看護職のキャリア形成を支援するための大学院教育について示唆を得たいと考えた。

I. 研究目的

地方都市山間部周辺の医療機関・福祉施設、看護職養成機関に勤務する看護職の、キャリア形成に関する体験や認識、大学院への進学意向を明らかにし、高度な看護職育成に貢献できる大学院修士課程構築に向けた示唆を得る。

II. 研究方法

1. 対象者

研究対象者は、新見公立大学に隣接する市町村（真庭市・高梁市・津山市・庄原市・三次市）の医療・福祉施設39施設のうち、研究協力の承諾を得た32施設に勤務する看護職である。

2. 調査方法

調査は、郵送による研究対象者への自記式質問紙により得られたデータを用いた。質問紙の設問は、個人属性と資格、看護職としての通算経験年数、キャリア形成に関わる研修会や講習会の受講経験、看護研究活動の経験、看護学修士課程への進学意向、入学の動機、進学したい領域、終了後の進路等とした(資料1)。各設問と回答の作成は複数の教員からの意見を参考に研究者間で原案を検討、修正補足した。配布に際しては、対象となる施設を統括する看護職責任者に対し、研究目的と研究方法、倫理的事項を電話にて説明し、研究協力の承諾を得た施

設宛に研究の概要を記した文書を郵送した。質問紙は各施設の看護職責任者から対象者に配布され、2012年6月から7月の間で、対象者からの直接郵送法により回収した。

3. 倫理的配慮

調査開始にあたっては、本学研究倫理審査会による承認を得た。対象となる施設を統括する看護職責任者に対し、研究の趣旨と方法、倫理的事項を電話にて説明した後、協力の承諾を得た施設宛に研究の概要を記した調査依頼書とともに質問紙を郵送した。調査依頼書には、質問紙は無記名であること、調査への協力は本人の自由意思によること、協力しないことでの不利益は一切ないこと、データは統計的に処理され研究目的以外では使用されないこと、個人の匿名性を厳守するためにID番号で厳重に管理されることなどの倫理的事項を記載した。それぞれの施設において参加者を募り、責任者から口頭にて倫理的事項を説明し、調査依頼書とともに質問紙を配布してもらった。対象者の回答を個別に郵送できるように返信用の封筒を添え、返送をもって本研究への協力及びデータを使用することを同意したものとした。

4. データ分析方法

統計処理はSPSS Ver.19を使用し、対象者の属性、キャリア形成に関する体験・認識については記述統計を算出した。キャリア形成としての学位修得の意向については、看護職経験年数別に χ^2 検定を行った。

III. 結果

1. 対象者の属性

2) 性別、専門教育の背景

706名から質問紙の回収があり、回収率は55.03%であった。性別は男性が19名(2.7%)、女性が687名(97.3%)、年齢は45歳以上50歳未満が最も多く、平均年齢は41.1歳であった(表1)。専門教育の背景は、専門学校が469名

表1 対象者の性別と年齢構成 性別人数%

性別	人数	%
男性	19	2.7
女性	687	97.3
年齢構成		
25歳未満	66	9.3
25歳以上30歳未満	70	9.9
30歳以上35歳未満	102	14.4
35歳以上40歳未満	99	14.0
40歳以上45歳未満	92	13.0
45歳以上50歳未満	120	17.0
50歳以上55歳未満	89	12.6
55歳以上	63	8.9
無回答	5	0.7
合計	706	100.0

資料1 看護職のキャリア形成と大学院進学の一ズに関する調査 (概要)

看護職としてのキャリア形成に関する質問						(人数)
あなたが今までに参加したことのある看護に関する研修会・講習会を選択してください。(複数回答)						n=701
	院内 513	看護協会 97	業者セミナー 19	実習指導 118	教員研修 258	
	看護管理 177	その他 176				
どのような領域に関心をおもちですか。(複数回答)						n=692
	がん 83	急性期 75	慢性期 84	看護管理 196	看護倫理 103	
	感染看護 173	救急看護 43	看護技術 63	老年看護 73	母性看護 195	
	小児看護 178	精神看護 142	地域看護 59	在宅看護 44	家族看護 10	
今後、キャリア形成のために取り組みたいと考えているものを選択して下さい。(複数回答)						n=462
学位	学士 12	修士 126	博士 94			
資格	保健師資格 23	助産師資格 26	認定看護師 29	専門看護師 6	看護教員 48	
	実習指導者 43	医療安全管理者 18	移植コーディネーター 95			
研修	新人看護師指導 443	訪問看護師養成 94	看護教員養成 327	認定管理者 252	緩和ケア 285	
キャリア形成を考えた際、あなたにとってどのようなことが障害となりますか。(複数回答)						n=706
	仕事との両立 104	退職できない 10	学費等 30	距離 65	子育て・介護 126	
	時間がない 178	家族の協力がいない 216	家族に相談できない 65	上司に相談できない 299	情報が得にくい 129	
どのような学習環境の整備や支援があればキャリア形成につながりますか。(複数回答)						n=663
	夜間開講 141	土日開講 130	奨学金の整備 277	サテライト 8	通信 180	
	子育てサポート 64	就業支援 24	職場の理解 118	情報提供 108	制度の充実 233	
大学院進学に関する質問						
あなたは大学院(修士課程)への進学を考えていますか。						n=561
	考えている 6	将来的に考えている 36	あまり考えていない 84	考えていない 435		
大学院(修士課程)への入学を考える際、動機づけとなることに最も近いものを1つだけ選択してください。						n=383
	専門領域での学修 135	キャリア形成 59	資格取得 104	看護管理者・指導者 18	学位取得 15	
	看護教育者 7	研究手法の修得 6	研究課題の究明 7	リフレッシュ 15	その他 17	
大学院修了後、希望される進路を1つだけ選択してください。						n=361
	教育機関 50	研究機関・研究所 18	医療機関 239	地域ケア機関 37	その他進路 17	

(66.4%) で最も多く、高等学校が111名(15.7%)、短期大学が85名(12%)であった(表2)。なお、今回の調査では、高等学校に専攻科を含んでいる。

表2 専門教育の背景

教育機関	人数	%
高等学校	111	15.7
専門学校	469	66.4
短期大学	85	12.0
大学	39	5.5
大学院(修士)	1	.1
無回答	1	
合計	706	100.0

2) 地域、職種、勤務場所、経験年数

地域は真庭市が最も多く、次いで新見市、庄原市であった(表3)。職種は看護師・准看護師が565名(80.0%)で最も多く、次いで保健師が16名(2.3%)、助産師17名(2.4%)、看護管理者85名(12%)であり(表4)、勤務場所は病院が最も多かった。看護職としての経験年数は6年以上10年未満が最も多く111名(15.7%)、次いで11年以上15年未満105名(14.9%)、26年以上30年未満103名(14.6%)であった(図1)。

表3 対象者の居住地

地域	人数
新見市	113
真庭市	117
津山市	66
高梁市	45
鏡野町	15
美作市	9
庄原市	108
三次市	120
日南市	31
日野町	25
その他	57
合計	706

表4 対象者の職種

職種	人数	%
看護師・准看護師	565	80.0
保健師	16	2.3
助産師	17	2.4
看護管理者	85	12.0
養護教諭	0	0.0
看護教員	9	1.3
その他	8	1.1
無回答	6	0.8
合計	706	

■人数

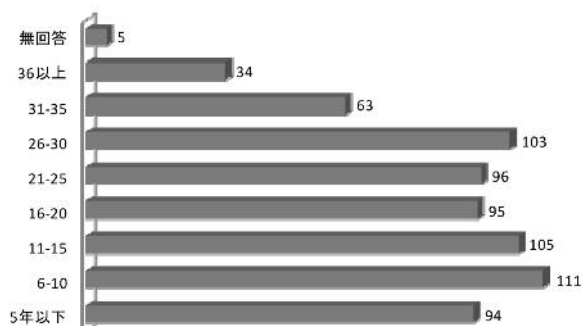


図1 看護職としての経験年数

3) 職種別経験年数

職種ごとの経験年数は、看護師・准看護師(以下“看護師”)では経験年数26年以上が152名(26.9%)と最も多く、次いで6~10年以下であった。また、経験年数15年以上20年未満の者が最も少なかった。管理者では26年以上の者が最も多かった(図2)。

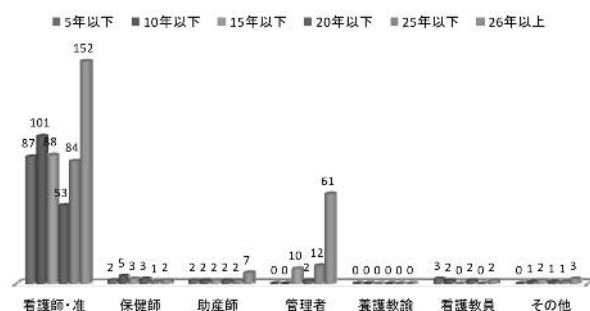


図2 職種別経験年数の構成

2. キャリア形成の体験と認識

1) キャリア形成に関わる研修等の受講状況

キャリア形成としての研修等の受講経験は、院内研修会への参加が最も多く、次いで教員研修会、認定看護管理者コースへの参加であった(図3)。関心のある看護領域

■人数

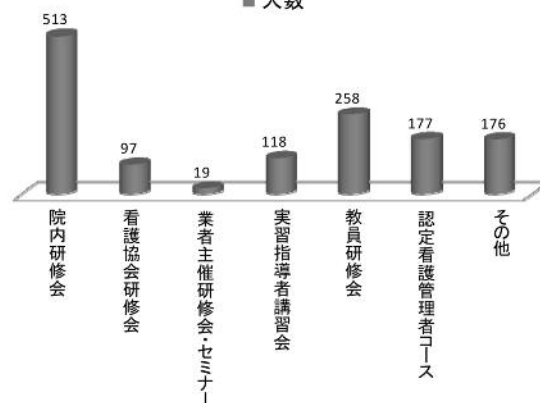


図3 研修会等の受講経験

看護職のキャリア形成と学位修得に関わる意向

は、看護管理領域が最も多く、次いで母性看護、小児看護、感染看護、精神看護領域であった(図4)。

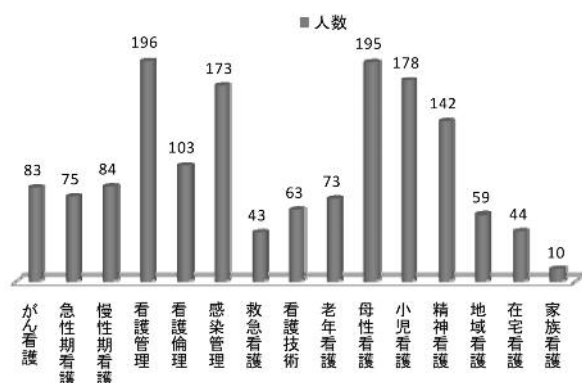


図4 興味・関心のある領域

2) キャリア形成に影響する因子

キャリア形成を考える際の影響因子についての回答(複数回答)では、障害となる因子としては上司に相談できない(299件)、家族の協力が得られない(216件)が多かった(図5)。一方、キャリア形成を促進する因子としては、奨学金制度(277件)、職場内の支援制度(233件)、通信制教育(180件)が多かった(図6)。

3) 看護職経験年数別資格取得の希望

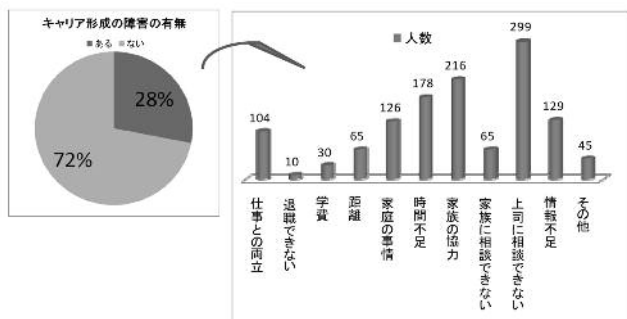


図5 キャリア形成の阻害因子

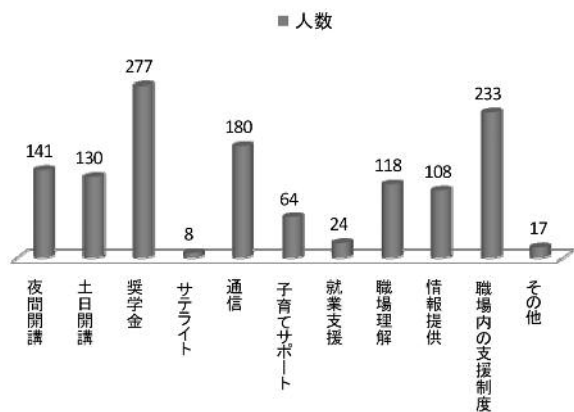


図6 キャリア形成の促進因子

看護職経験年数別の資格取得の希望については、323名から回答があった。経験年数の浅い看護職は学士課程への進学を希望する者が多く、経験20年以上では修士課程への進学を希望している者が多い傾向がうかがえた。助産師資格取得希望は経験5~10年の看護職に多く、認定看護師資格取得希望は経験20年以上の看護職が多かった。看護教員資格取得希望は経験5~10年の看護職に多く、移植コーディネーターの資格取得は経験20年以上の看護職に多く、いずれも有意差が認められた(表5・図7)。

表5 経験年数別進学・資格取得の希望

	経験年数				合計
	5年未満	5年-10年未満	10年-20年未満	20年以上	
大学進学	4	3	5	0	12 **
修士進学	21	20	40	45	126 *
博士進学	11	16	34	33	94
保健師	3	7	7	6	23
助産師	3	10	7	6	26 **
認定看護師	0	1	5	23	29 **
専門看護師	0	1	3	2	6
看護教員	7	17	8	16	48 **
実習指導者	1	4	10	27	42
医療安全管理者	2	4	4	8	18
移植コーディネーター	8	2	31	54	95 **
無回答					182
合計					701

* p<0.05 ** p<0.01

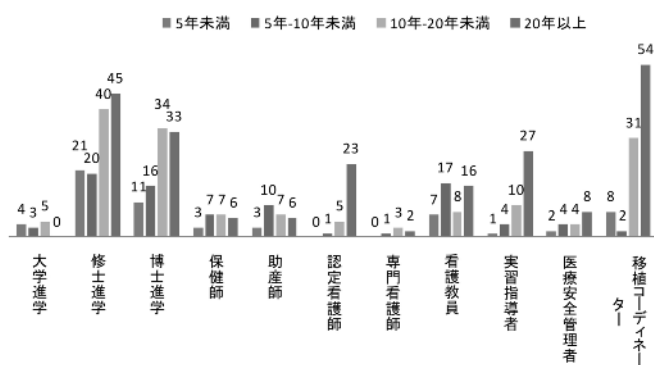


図7 経験年数別資格取得の希望

3. 大学・大学院進学に関する意向

1) 職種別学位修得の意向

キャリア形成としての学位修得を考えていると回答した者232名(33.1%)を職種別にみると、看護師では修士課程への進学を希望する者が121名(21.4%)で最も多く、次いで博士課程92名(16.3%)であった(表6)。

表6 職種別学位取得の意向

職種	人数	学士	修士	博士	合計
看護師・准	565	11	121	92	224
保健師	16	0	2	0	2
助産師	17	0	0	0	0
管理者	85	1	1	0	2
養護教諭	0	0	2	0	2
看護教員	9	0	0	2	2
その他	9	0	0	0	0
合計	701	12	126	94	232

2) 大学院進学に関する認識

大学院への進学動機としては、「専門領域での学修」が最も多く(19.1%)、経験20年以上の看護職が47.4%を占めていた。次いで「資格取得」(14.7%)、キャリア形成(8.4%)であり、何れも経験20年以上の看護職の回答が多かった(表7・表8・図8)。大学院修了後の進路については、医療機関への進路を考えているとの回答が最も多く、次いで教育機関、地域ケア機関への進路が多かった(表9・図9)。

修士課程への進学を希望している者のうち、本学への進学を検討している者は34名であった(表10・図10)。

表7 進学希望の有無と動機

	%	人数
専門領域での学修	19.1	135
キャリア形成	8.4	59
資格取得	14.7	104
学位取得	2.1	15
看護管理者・指導者	2.5	18
看護教育者	1.0	7
研究手法の修得	.8	6
研究課題の究明	1.0	7
リフレッシュ	2.1	15
その他	2.4	17
無回答		145
合計	100.0	706

表8 看護職経験年数別進学動機

進学の動機	看護職経験				合計
	5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上	
専門領域での学修	9	17	45	64	135
キャリア形成	4	9	20	26	59
資格取得	17	19	41	27	104
学位取得	2	4	3	6	15
看護管理者・指導者	1	2	3	12	18
看護教育者	1	3	2	1	7
研究手法の修得	0	0	2	4	6
研究課題の究明	1	1	2	3	7
リフレッシュ	1	1	3	10	15
その他	2	3	4	7	17
合計	38	59	125	160	382

■看護職経験 5年未満 ■看護職経験 5年以上 10年未満 ■看護職経験 10年以上 20年未満 ■看護職経験 20年以上

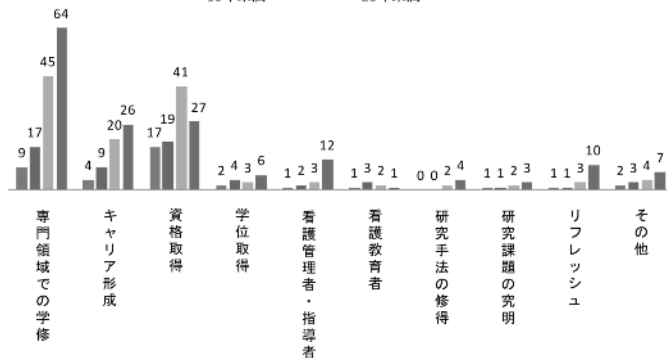


図8 看護職経験年数別修士課程への進学動機

表9 大学院修了後の希望進路

	%	人数
教育機関	7.1	50
研究機関・研究所	2.5	18
医療機関	33.9	239
地域ケア機関	5.2	37
その他進路	2.4	17
無回答	48.9	345
合計	100.0	706

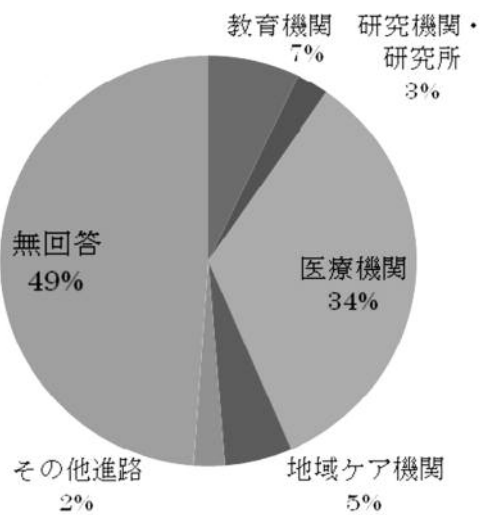


図9 大学院修了後に希望する進路

表10 本学修士課程への進学の意向

	人数
希望する	8
できれば希望	26
あまり希望しない	4
希望しない	5
合計	43

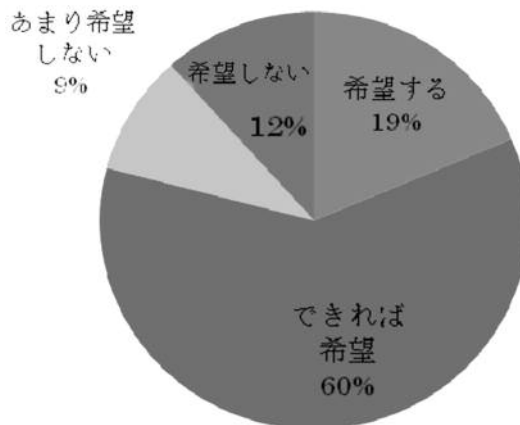


図10 本学修士課程への進学の意向

IV. 考察

1. 地方都市山間部周辺に在住する看護職のキャリア形成への支援

本学周辺に在住する看護師は、45歳以上50歳未満の者が最も多かった。職場では管理職等の重責を担い、家庭では家族の中心を担っている年齢である。看護職の年齢階層を全国的に調査した報告書(日本看護協会2002)によると、看護師では30~34歳が最も多く、次いで35~39歳であることから、地方都市山間部周辺における看護師は、全国平均に比べ年齢が高いのが特徴であるといえる。

研修会等の受講経験では院内での研修会が最も多く、看護協会や業者主催の研修会への参加経験は少なかったことから、院外の研修会への参加困難な要因があると考えられる。地方都市山間部周辺に在住する看護職が、看護協会や業者主催の研修会に参加しにくい要因の一つに、開催地までの距離の遠さがあると考えられる。県北から都市部への移動には、関西圏まで2~3時間弱、関東圏までは5~6時間程度必要であり、日帰りでの参加は難しいのが現状である。仕事を2日以上休まなければならない状況では、参加を躊躇することにもなりかねない。公私ともに多忙な年齢にある看護職のキャリア形成への支援として、移動に伴う負担が軽減できる場所で、キャリアに匹敵する研修会等を開催し、物理的負担の軽減を図る必要性が示唆された。近隣に在住する看護職の研修の意向についてさらに詳細に調査し、看護職のキャリア形成への支援となる研修会を本学において開催することが急務であると考えられる。

関心のある領域では看護管理が最も多く、次いで母性・小児・感染・精神領域であったが、移植コーディネーター、看護教員、認定看護師の資格取得への希望者も多かった。また、資格取得のみならず、より専門的な知識・技術への知的関心として、経験年数の浅い看護職は学士課程への進学、経験20年以上では修士課程への進学を希望している看護職の存在が示された。本学の前身である短期大学の卒業生を対象とした調査⁵⁾では、大学への進学希望者は24.6%、大学院への進学希望者は41.1%であった。今回の調査では学部進学希望は1.71%と低い結果であったが、修士課程への進学希望は41.1%と、先行研究と同じ割合であった。看護職経験年数が長いほど修士課程への進学を考えている割合が増加している背景には、専門領域での学修を深めることが看護職のキャリアを高めることになると考えるベテラン看護職者の存在があると考えられる。一方で若い看護職は、学士修得ののち専門領域での資格取得を検討し、経験を積んだ看護師は自身のキャリアをより洗練させるために、専門領域でのさらなる学修を目的とした修士課程への進学を検討していると考えられる。

職業的キャリアには専門的な技能を高める客観的キャリアと、アイデンティティを意味する主観的キャリアがある。若い看護職は、より専門的な知識・技術を磨くことで、客観的なキャリア形成を促したいと考える傾向があるのではないかと考える。看護職経験年数10年未満では、職場外での研修と看護系大学の活用割合が高い⁶⁾⁷⁾⁸⁾といわれていることから、若い看護職のキャリア支援には、資格取得を目的とした研修や講習会を、本学が拠点となり開催すること、大学への編入学を積極的に支援する仕組みの構築が必要であることが示唆された。また、ベテラン看護職は、大学院修士課程においてより専門性を深め、自己の存在価値を高めることで主観的なキャリア形成を促したいと考える傾向があるのではないかと考える。大学院進学を通して解決したい課題の有無について、50歳以上の8割、40歳代の5割以上、さらに看護部長・主任群の5割以上が課題を抱えており、経験年数を積み、職位が上がるほど課題を抱えやすくなる⁹⁾ことから、経済的に自立し、主体的に学ぶ力のあるベテラン看護職が、明確に抱えている課題や、さらなる専門分野の知見を深める支援となる教育課程を、修士課程において構築する必要性が示唆された。

2. 大学院進学を希望する地方都市山間部周辺に在住する看護職に対する支援と課題

キャリア発達の構造には、基礎としての意思やコアの存在があり、このキャリアのなかで看護の追及が行われ、発達の基礎をより強固にし、発達のプロセスが繰り返され、さらなる発達を遂げるというキャリア発達の構造モデルがある¹⁰⁾といわれている。本学周辺に在住している看護職は、都市部にある医療施設には及ばない環境の中で、地域医療の一端を担いながら職業を継続している。それぞれの生活背景に順応し、折り合いをつける工夫をしながら、地域の医療を支えるべく日々奮闘していることから、基礎としての意思やコアの存在は十分に持ち得ていると考える。キャリア形成を促進する様々な教育プログラムが都市部に集中する中、地方都市山間部においても十分にキャリア形成が実現することで、さらなる発達を遂げることが可能になると考える。

看護職としての成長欲求の強い者は、そのキャリア形成の方向性として専門性志向が強く、積極的に院内・外への研修会等に参加するという行動をおこし、中でも看護職としての自分自身に自信があるかどうか、成長欲求の度合いが強いかどうか等が関係しており、このことが看護業務を通しての自己実現志向を強めさせており、こうした傾向は看護職個々人の経験年数や年齢と関係がある¹¹⁾。経験30年以上の看護職では、管理者や経験に合うキャリアアップを志向しているが、一方で現状維持に精一杯でキャリアについて考える余裕がない看護職種に対しては、組織としての支援や、キャリアカウンセリング

などの必要性が明らかにされている¹²⁾。本学が、周辺地域に住む看護職のキャリア形成に関わるニーズを満たすためには、社会人入学支援体制を備え、就業との両立を希望しているベテラン看護職の希望に添う教育的環境整備が急務であるとともに、キャリア形成に必要な具体的な情報提供や相談体制構築の必要性が示唆された。その他、経済的な保障や進学し易い職場環境のためのシステムづくりなど、社会的な支援はまだまだ充足していない現状であるが、より専門的な看護を学ぶ場として、本学が果たす役割と期待は大きいと考える。

V. 結果

高度な看護職育成に貢献できる看護学修士課程構築に向けた示唆として、以下の3点が明らかになった。

1. 資格取得の意向を満たす研修会・講演会を積極的に主催し、若い看護職者のキャリア形成を支援する
2. 看護上の課題や、専門分野の知見を深めるための修士課程プログラムを構築し、ベテラン看護職者のキャリア形成を支援する。
3. 社会人入学支援体制を整え、職業との両立が可能なカリキュラムを構築する。

謝辞

本調査にご協力いただきました看護職の皆様へ感謝申し上げます。

文献

- 1) 清末絵理, 阿部百合子, 細越智恵子: 看護師におけるキャリアアップに対する意識と職務満足度との関連についての検討. 近畿中央病院医学雑誌, 29, 19-26, 2009.
- 2) 津本優子, 長田京子, 樽井恵美子, 他: 看護師のキャリアニーズの実態 - 医療施設の検討. 島根大学医学部紀要, 31, 25-35, 2008.

- 3) 鈴木久美子: A 大学病院に就業する中堅看護師の職務満足度の現状 達人看護師との比較を通して. 山梨大学看護学会誌, 6(1), 27-32, 2007.
- 4) 吉田桂子, 尾崎フサ子: 社会人経験後看護を学び医療に従事している人のキャリア発達. 日本看護学会論文集 看護管理, 37, 350-352, 2007.
- 5) 古城幸子, 土井英子, 澤田由美: 看護短大卒業後の現状とキャリアアップへの意識(第1報) - 大学院教育に関する卒業生への調査 -. 新見公立大学紀要, 31, 35-41, 2010.
- 6) 林由美子, 池邊敏子, グレック美鈴, 池西悦子, 橋本波枝, 平山朝子: 岐阜県内看護職のキャリア発達に関する調査 第1報 - 岐阜県立大学が実施している諸制度の認知と大学院準備への希望 -. 岐阜県立看護大学紀要第2(1), 28-33, 2002.
- 7) 池西悦子, 池邊敏子, グレック美鈴, 林由美子, 橋本波枝, 平山朝子: 岐阜県内看護職のキャリア発達に関する調査 第2報 - キャリア発達を目指した活動の実態と看護系大学における制度活用希望者の特徴 -. 岐阜県立看護大学紀要, 2(1), 34-40, 2002.
- 8) グレック美鈴, 池邊敏子, 池西悦子, 林由美子, 橋本波枝, 平山朝子: 岐阜県内看護職のキャリア発達に関する調査 第3報 - 編入学を希望する看護職の要因分析と編入学への期待 -. 岐阜県立看護大学紀要, 2(1)41-47, 2002.
- 9) 松下年子, 岡部恵子, 天野雅美他: 大学病院関連医療施設に就業する看護師の大学院修士課程入学への関心, 日本看護研究学会雑誌, 32(4), 39-50, 2009.
- 10) グレック美鈴, 池邊敏子, 池西悦子, 林由美子, 平山朝子: 臨床看護師のキャリア発達への構造, 岐阜県立看護大学紀要, 3(1), 1-8, 2003.
- 11) 山内京子, 戸梶亜紀彦: 看護職のキャリア形成と自己概念に関する研究, 看護学統合研究 5 (2), 6-17, 2004.
- 12) 前掲書 2)